

中村俊輔

プロサッカー選手

shunsuke
nakamura



Profile

戸塚区出身
市立深谷小・中学校
桐光学園高等学校 卒業
横浜マリノス(現:横浜F・マリノス)を経て
現在はジュビロ磐田に在籍

僕が育った深谷 キラキラしたところに住んでるなって 思っていました

戸塚区深谷町で育ちました。今でも小さい頃の話はよく覚えてますよ。特に印象に残っているのは、何と言ってもやっぱり「横浜ドリームランド」ですね。潜水艦も乗ったし、ゴロンって動く観覧車とか。あと、「シャトルループ」っていう宙返りするジェットコースターも乗りましたね。「ハイハイおじさん」っていう名物おじさんもいて、おじさんのかけ声に合わせて歌ってたなあ。

子どもの頃はドリームランドが日本で一番大きい遊園地だと思っていました。夏はプール、冬はスケート、他にもボウリングとかゲームセンターでも遊べて、

なんて楽しいところに住んでるんだろうって。当時の戸塚に、エンパイアホテル(現在は横浜薬科大学図書館棟)みたいな横浜のランドマークになる建物があったことも誇らしかったし、ドリームハイツにたくさん友達もいて、なんていうか、最新の場所っていうか、楽しくてキラキラしたところに住んでるんだなって思っていました。



サッカーのルーツは戸塚

ドリームランド近くの「^{みその}深園幼稚園」という幼稚園に通っていて、そこでサッカーを始めたのが僕のサッカーとの出会いですね。もともとは幼稚園の体操クラブに入っていたんですが、そこで先生がサッカーを教えてください、体操クラブのメンバーで大会に出てみよう!って出場したら、なんと優勝してしまって。それが僕や兄の通っていた「横浜深園サッカークラブ」の始まりです。

幼稚園を卒園して深谷小学校に通い出してから、幼稚園のグラウンドに通って練習していました。幼稚園の狭いグラウンドだったからこそ、ボールをコントロールする技術が身についたのかもしれないし、キャプテンになって、自分がボールに向かうんじゃなくて、「他のメンバーにうまく動いてもらってチームが勝てるように考える」という経験が最初にできたのも戸塚。もちろん、中学、高校、プロチームに入ってからいろいろな経験はしているけれど、戸塚は自分にとってサッカーのルーツとなる大事な場所ですね。



自分に向き合うこと、そして自分で考える 大切さを若者たちに伝えたい

高校2年生の頃から、サッカーノートを書き続けています。絵を描いて自分のプレーを振り返ることもあるし、自分の思いを文字にして書き連ねていくことも。例えば、試合で負けちゃった日なんかは「あー負けちゃったな。まあ、こんなこともあるか」って思いたくないし、自分の現状に満足したくない。どうすれば、もっと良いプレーができるのかをいつも考えたいんです。ノートに書くことで自分を客観的に見ることができるし、そうすることで、「何をクリアしなくちゃいけないのか」という課題が見えてきたり、昔のノートを読み返して「あの時はこんな風に思っていたんだな」って振り返ることもできる。

誰でもどんなに頑張ってもうまくいかないことや壁に当たることはあると思うけれど、生きていれば山があったり谷があったりするのは当たり前。大事なのは、谷に落ちた時にどれだけ自分と向き合えるか。足掻いたり、もがいたりせず、いったんその状況を受け入れること。考えるのはそれから。力まないで力が抜けた時、そんな時にはきっと、良い出会いがあたりチャンスが巡ってくるはず。これからを担う若者たちにも、まずは自分に向き合って、そして、それからどうすればよいのか、自分で考えられるステキな人になってほしいと思います。



田雑区長と…

瀬川 晶 司

プロ
棋
士

shoji
segawa

Profile

横浜市出身。戸塚区在住。
市立日限山中学校
県立舞岡高等学校 卒業



幼いころからプロ棋士になることを夢見ていました。プロ棋士になるためには、奨励会に在籍し26歳までに四段に昇段しなければならぬのですが、夢かなわず奨励会を退会し、一時はプロ棋士への道を諦めざるを得ませんでした。

サラリーマンとして仕事をしながらのアマチュア時代は、仕事の息抜きとして将棋を楽しんでいましたが、「将棋が好きだ」という強い気持ちと、後押ししてくれる方々のおかげでプロ棋士になることができました。好きなことを職業にできてとても幸運だと思っています。

将棋に出会ってからこれまで、楽しいことも辛いこともたくさんありましたが、小学校の時に将棋を勧めてくれた担任の先生や、ライバル、親友との出会い、そういったさ

まざまな出会いがあって今の自分があると思っています。誰にでも普段は気付かないけれど温かく見守ってくれている人がいて、皆さんの今があるのではないのでしょうか。

小さなころからずっと、戸塚は私にとって身近な場所です。買い物をしたり、学校に通ったり、今も戸塚区に住んでいます。

奨励会退会後の一年間は、戸塚図書館に足繁く通って、色々な本を読みました。プロ入りができず整理のつかない気持ちを、静かに受け止めてくれたのが戸塚図書館でした。手当たり次第に色々なジャンルの本を読み、人生で一番本を読んだ一年だったと思います。

そんな自分の半生を綴った著書「泣き虫しよったんの奇跡」が映画化され、昨年(平成30年(2018年))

秋に公開されました。何事も思いを持って一生懸命やってみることでチャンスが開かれること、挑戦することに「遅い」ことはないということがテーマの映画で、お子さんから大人まで色々な世代の方に見ていただきました。皆さんも諦めずに夢に向かって挑戦してくれるとうれしいです。



©2018「泣き虫しよったんの奇跡」制作委員会

榊原 政敏
榊原 広子

ダ・カーポ

folk・duo
da capo

Profile

戸塚区在住。
1973年デビュー、ヒット曲に「結婚するって本当ですか」、「野に咲く花のように」。
2002年横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞

原点は踏み台ステージと物干し台

私(政敏)は、戸塚小学校のすぐ近くに住んでいて、旭町通商店街のにぎわいを肌で感じながら育ちました。父が音楽好きで、毎晩夕飯後にタンスの前に踏み台を置き、6人きょうだい順番にあがって歌っていましたが、この踏み台ステージでの楽しい記憶が私の音楽の原点です。広子は栃木県出身。小さな頃から歌うことが好きで、中学生頃からフォークギターを始め、自作の曲を物干し台で歌っていたそうです。

音大に進んだ兄の影響もあり、私も中学生頃からフォークギターで歌ったり、ピアノで曲を作ったり、将来は音楽をやりたいと漠然と考えていました。高校卒業後、保土ヶ谷区西谷での音楽サークルの活動を通じて、広子と私は出会いました。



やがて音楽活動に専念するようになった私たちがデビューする時に、「初心を忘れないように」との思いを込めて、「ダ・カーポ」(「最初に戻る」という意味の演奏記号)をグループ名にしました。自然体で歌ってきて、昨年(平成30年(2018年))でデビュー45周年。初心を忘れず同じスタイルを続けてこられたのは、皆さんのおかげと感謝しています。

音楽の力を伝えていきたい

東日本大震災以降、毎年石巻市おがつ雄勝のイベントなどに参加しています。最初は被災した皆さんを前に歌うことに悩みましたが、いつもと同じように普通に歌うことで力になることができると思うようになりました。音楽を通じて、普通のありがたさを感じみじみと感じます。

かつて広子のリハビリ治療のため、半年ほど活動を休止したことがありますが、苦しいときほど音楽による癒しがどれほど役に立つか、深く理解しました。音楽にはいつも大切な役目があり、歌うことでその力を皆さんに伝えていきたいと思っています。

地元への思い

横浜で生まれ育ったダ・カーポだからこそ、地元から応援していただくのが一番うれしいです。事務所も区内にあり、戸塚にはとても愛着を感じています。かつて宿場町だった戸塚は古き良き面影を残し、自然も多く、戸塚で生まれ育った私はもちろん、広子もふるさとのように感じています。普段から買い物をしたり、旧東海道を歩いたり、近所の皆さんとも顔見知りです。若い世代の皆さんにもぜひ戸塚のよさを知ってもらい、後世に引き継いでいってほしいと思います。

私たちの今があるのは、いろいろ経験して音楽の道を見つけたからです。未来を担う子どもたちにも、ぜひいろいろなことを経験し、自分の夢を見つけてほしいですね。(政敏さん談)

